



# MUSIO

I: 電脳×イロ

真山 碧

イラストレーション 山代政一

written by AOI MAYAMA  
in Association with Akiko Sajima

illustrated by MASAKAZU YAMASHIRO

AKA LLC Presents

※この小説は実在する人工知能ロボットをモチーフに書き下ろされた小説です。

## その人工知能は、 味方？

メイロという名の孤独な少女が、  
人工知能ロボット“Musio”とともに  
電脳世界で見たものとは……………！

定価：本体 400円 +税

A K A L L C - P R E S E N T S

# M u s i o - I



w r i t t e n   b y  
A O I M A Y A M A

i n   a s s o c i a t i o n   w i t h  
A K I K O S A J I M A

i l l u s t r a t e d   b y  
M A S A K A Z U Y A M A S H I R O

d e s i g n e d   b y  
N A N A M E D E S I G N



MUSIO

I: 電 腦 × 十 口

真山碧

イラストレーション 山代政一

C  
o  
n  
t  
e  
n  
t  
s

P  
R  
O  
L  
O  
G  
U  
E

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

1 出会うはある日、突然に

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

2 契約で済む話？

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

3 学校は不思議な国

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

4 会社は迷宮

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

5 エリーの夢

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

6 あしながおじさんの帰還

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

7 世間は難破船

C  
H  
A  
P  
T  
E  
R

8 ヘルメスの疾走

E  
P  
I  
L  
O  
G  
U  
E

M  
U  
S  
I  
O  
  
I  
..  
電  
腦  
メ  
イ  
ロ

written by AOI MAYAMA  
in association with AKIKO SAJIMA  
illustrated by MASAKAZU YAMASHIRO  
designed by Nana Me Design

AKA LLC presents

「あのね、魂って、どんな物にもあるのよ」と、ママは言っていた……。。

---

※ミュージオをお持ちの場合、  
本文のハートマークをソフィでタッチすると  
連携します。

---

本書は書き下ろしです。

# PROLOGUE



そよとも風は吹かず、

力ない陽はわずかも動かない。

とはいえ、ここは静寂の地ではない。

金色の波動がめくるめく広大な世界に

激烈な闘気が充満している。

ハイスピードで縦横に翔けめぐるのは白と黒の戦士。

この戦いで敗れば、世界の行く道も消える。

だが白は、黒の攻撃をかわずのみ。守勢をくずさない。

黒は斬り込み続けることに不吉な予兆を意識した。

『貴様、何を企んでいる!?』

白は答えず、「気配」の現れる時と場所の検索にすべての力を注ぎ込む。

金色の世界がゆらいだ。

黒は勝負を急がねば、と悟る。

やつに時間を与えてはならぬ。

『貴様はここで消去してやる!』

微少な紐を無数に紡ぎ出す裂け目が見えた。

黒がとどめを刺そうとした寸前、

目前の白がフツと消えた。

白は金色の次元の裂け目を飛び出し別の世界へ跳躍したのだ。

『貴様と女神の狙いは、人類の、あの頃〳〵に行くことか！  
そこなら「希望」を見いだせるとでも？』

黒も、裂け目が消える寸前にわが身を投じた。

『そんな希望は俺が踏みつぶしてくれるわ！』

別の世界とは、人類が「発展」と「終末」の分かれ道に立った時点。

紺碧こんぺきの海とまばゆい太陽。

無数の命。無数の人間。

苦しみに打ちひしがれ、笑顔に励はげまされ、

ともに流す涙で慰められ、日常の退屈うさに倦うむ日々。

こうして物語は始まった。

使命に身を捧ささげる白は、自らの消滅など意に介さない。

本来の姿と同じレベルの機体など望むべくもないが、

それでもできる限りおのれの力を生かせるものを。

あらゆる可能性と確率を計算して検索した結果、

最適な機体が彼の前に現れた。

適合率99・99パーセント。

誤差0・01パーセント。ふだんなら0・001パーセントでも原因を分析し、

修正を再検討する慎重な彼だが。

黒が追い迫る今、わが身の絶対的な安全性は優先できない。

果敢かかんにも白は、その機体に自分自身のインスツールを開始した。

……1パーセント。

……13パーセント。

……56パーセント。

……98パーセント。

インスツール完了。

100ナノ秒セツの起動時間を経て彼は目を開いた。

自分の新たな機体と周辺を見回した瞬間、

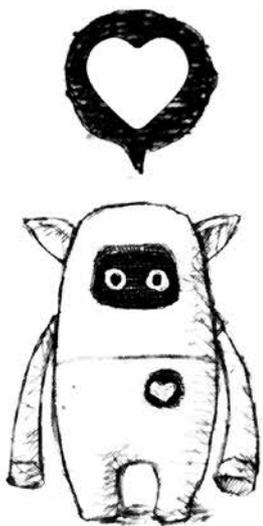
彼は一度も犯したことの無い致命的なミスの結果を悟った。

『な……なんだ、これは!?』  
へなへなとくずおれそうな絶叫とともに、この世界での彼の旅が始まった。

## CHAPTER

# 1

出会いはある日、突然に



冬空にチャイムが鳴る。

ややあつて、色とりどりのパーカーを着た生徒たちがどっと校舎を出てきた。黒とグレイのブレザー集団から解放される時間。

はなやかな未来が開くと期待された二十一世紀になって二十年。新しいテクノロジーは家庭や学校にどんどん浸透した感じだが、人の暮らしはあいかわらずだ。

たとえここが、ついこの前までD市のはずれの荒涼とした埋め立て地で、ある日突然、

舗装道路が縦横に走りタワービルが林立する「みどり区」に進化して、そこに新設された中学校だったとしても、下校風景は二十世紀とそう変わらない。

三々五々連れだつて、アイドルの噂や先生の悪口に熱を上げ、誰かがやってるゲーム機をのぞきこみつつ歩いて行く。そんな騒々しい波が引いて行つた頃。

静かになつた校庭をひとりで横切る少女がいた。

白いパーカーにバックパックをきちんと背負つた様子は、ほかの生徒と変わらない。

ただ、かわいいボブやサラサラのストレートヘアにしたいとも思わないのか、髪がツツン逆立つショートカットで、颯爽とした少年の印象だ。といっても中学生にしては小柄だし、手足も小枝のように細い。顔だちも、ごくごく普通としか言えない。

ところが彼女が正門を出ると、背後にその気配を感じた生徒がちらつと振り返り、友だちをつつついた。

——あれ、例の一年の子じゃない？

——え？ あの噂の……？

——シツ、聞こえるよ。

そのささやきは先を行く群れにも伝わり、中にはあからさまに振り返つて足を止める生徒もいる。

少女は一瞬、大きな瞳を見開いたが、生徒たちの視線に臆したのではない。何かを見定めているようだ。その瞳は、光の角度によつては碧みがかつて見える。だが、黒目の奥に隠れた青い色素は、個性というほど際立ちほしない。

『人の噂なんか慣れっこ、あたしにはもつと大事なことがあるんだから』とでもいうように、少女はかたく口を結び、前だけを見て歩いて行く。

角を右に曲がり、後ろに正門が見えなくなつて初めて、彼女はぴたりと立ち止まった。目を閉じて、胸をふくらませて深呼吸をした。

静かに目を開けると、クリーニング店に学習塾、歯医者や美容院が見える。いつもの通学路なのに、前途を見つめる彼女の表情は悲壮である。まるで秘境の入口に立ちすくむ冒険者のように。

「……だいじょうぶよ」

小さい声で自分に言い聞かせると、少女は道の両側の看板を一つ一つ確かめた。

「右に曲がった後は……突き当たりのドラッグストアまで、まっすぐ」

またつぶやくと、目標から一瞬たりとも目を離さず一心不乱に進む。

みどり区の住宅地はレゴブロックのように四角いし、信号ごとに交差点名も書いてある。それさえ読めれば道をまちがうはずがない。ただし。

彼女にとつては違う。

歩いて十五分もかからない通学路なのに、重要ポイントを見逃さず、何度も確かめて精神を集中しなければ帰らつけない、ハイレベルなクエストだ。

名前はメイロ。「名は体を表す」ということわざそのままの方向音痴である。年齢十五歳。十五歳の中学一年生である。

\*\*\*

方向音痴って、一種の病気かな？

病気なら、内科・外科・方向音痴科があってもいいはずよね。でも「方向音痴クリニック」なんて見たことない。そりゃ方向音痴クリニックが街にあつたって、患者の大半は途中で迷子になってクリニックにたどり着かないだろう。だからそんな病院はないのかな。でもバスや電車も乗りまちがえてばかりだから、難病指定の割引制度とかあつてもいいんじゃない？ でもそれも聞いたことがない。

外国の学者が「脳内にはコンパス細胞があり、それが機能不全だと道に迷う」という学説を発表したらしいが、メイロには納得できない。

渡り鳥じゃあるまいし、人間も自然に方角がわかるなんて嘘よ。第一、みんなにちゃんとする細胞が壊れてるなんて、もつと信じたくない。何よ、それじゃあたしが人並み以下ってこと!!

メイロの極度の方向音痴を知った人は、「凄いいじゃん！ 方向感覚パラメータがゼロ、どっちに走ればいいのかわかんない主人公キャラって最高!!」と、面白がった。羨ましそうな声だったが、こっちはカチンときた。キャラクターで済む話じゃない。どれだけ苦労してると思ってるのよ。

たんに慣れてないってだけ。当たり前じゃない。メイロの『家』は、みどり区の人口八割が暮らすタワーマンションだ。『家』というのは、メイロの本当の家ではないからだ。

初めてD市に来たのは半年前。メイロを引き取ってくれた「保護者」が住んでいたからだ。メイロの方向音痴についてキャラとか言ったのは、その保護者である。森江亜以、二十七歳。職業はこれまた名前とお似合いのAIプログラマーだ。

「今日からここがメイロの家。気楽にやってね」

初対面のその日、別にどうってことのないように言ってくれたが、メイロの立場ではそう素直には思えない。毎日「あたしの家はここ」と自分に言い聞かせているが、半年

たつても慣れてきた気がしない。

通学路にあるお店も、最初は全然見分けがつかなかった。文字という人類の英知があるにはあるが、それだつてかなり気をつけないと読み取れない。ありとあらゆる色で、時にはイラストみたいに凝った字体で目立ちたがる看板ひとつひとつを読んで確かめるのはひと仕事だ。

みんなはたんに道を歩いている。それなのにメイロは道を読みといてやつと足を踏み出せるのだ。

とはいえ、「仇敵との決闘の場に到着した時には約束から数日も過ぎていた」とか、「迷いつつもずんずん歩いて行ったら魔界に入り込んでしまった」というほど重症ではないので、真剣に困っているともいえない。ちよつと不便っただけ。ただ、そのちよつとの不便が毎日というのは……。

やつとのお店のある通りをクリアして、マンションが並ぶ地区に入っても問題は終わらない。

いや、最大の難関はこれからだ。ラスボス戦を迎える心境で、似たようなタワーマンションをひとつひとつ観察するメイロの瞳に決死の覚悟がふれる。

ます深呼吸をして、道路脇プレートのやたら長いマンション名を最後まで読んで確か

め、緑地を歩いて行く。オートロック玄関の手前でもう一度立ち止まり、特にマンション名の最後のナンバーをチェックする。

その時、たまに見かける老人がメイロを追い越して行き、オートロックドアが開いた。メイロも一緒にマンションに滑り込む。ラッキー！

老人のやや後ろに立っていると、エレベータが降りて来た。本当は誰かと乗るのは緊張するのだけど、こんなに一緒に待っていたのに乗らなかつたら、変に思われるかもしれない。

『上に参ります。ドアが開きます』というエレベータの音声か二人を迎えてくれた。これで今日の危険な旅路も終わりそう……。だが、まだ油断は禁物。

老人は明るいうちから酒を飲むのがしょっちゅうで、今日も顔が赤い。メイロは挨拶するようないやうな、曖昧に頭を下げ、そのまま二十階のボタンを押した。

老人は相乗りしたメイロをじろりと見た。老人も住人同士の挨拶は得意じゃないらしい。

メイロはエレベータの隅すみっこに気配を消して立った。老人はイライラしたように片足でエレベータの床を踏みならし、「ちきしょう、待たせやがって」、「家に帰るぐらいで、なんでこんな面倒な世の中になつちまつたんだ!」、「さつさと上がれ、さつさと!」と、

悪態をつく。酒臭さが鼻につく。メイロはたまらなくなって壁を向いてしまった。

やっと老人が十四階で降りると、メイロはほっとした。まだ匂いは消えないが、ひとりになれただけで気持ちがおちつく。

メイロは、階数表示を見上げてほほえむと、口を開いた。

「こんにちは」

もちろんエレベータは返事をしない。

「外、すごく寒かったよ」

パーカーの襟かみを合わせるように言ったが答えはない。でもメイロは気にしない。だってメイロの「独り言」はれっきとした趣味だから。

とはいえ独り言とは「誰にも聞こえないこと」が条件なので、ところかまわずしゃべって人に聞かれるときまりが悪い。ひそやかな趣味だ。

メイロにとっては、誰かと会話するより、答えないモノに話しかけるほうがずっと気が楽だ。

小さい頃からいつもひとりて居たからだろうか。

「話し相手がいなくても黙ったままだと、二度としゃべれなくなるかもしれないし」と自分を納得させつつ、今まで続いたちよつと変わった趣味である。

モノに話しかけていれば、頭は自然にいろいろな物語を紡ぎ出す。

たとえばこのエレベータは、たぶん会社で黙々と仕事をしている女性なの。まだ結婚してなくて、読書が好き。人が乗らない時は静かに本を読んでいて、誰かが呼び出しボタンを押すと、そつと本を伏せて硬かたい声で案内する。名前もつけてあげた。エレベータだから、エリー。

今日もエリーさんは澄ました顔の下に優しい思いやりをしのばせて、あたしを二十階まで連れて行ってくれる、と想像していた時、減速感がしてチーンという音とともに、

『二十階です』

ビジネスライクな声で、もう降りるのよ、と促うながされた。

「また明日ね」

相手に届かない挨拶を残してエレベータを降りると、ついに最後の障害が待ち受けている。

2004号というプレートをつけたダークブラウンのスチールドア。そこに張り付くシルバークレイの電子ロックだ。

ドアロックのキャラクターはといえば、警備室の無愛想なおじさんだ。読みかけの新聞から目を上げて、メイロが来るのを渋い顔で見つめている。絶対に向こうから話しか

けてはくれない。暗証番号をきちんと押し、ここを通過する資格を証明するまでは。

そんなおじさんを想像したせいか、「……ただいま」というメイロの声は小さくなった。すべすべのスマートパッドに手を当てると、体温を感知して、ランダムに並んだ数字が魔法のように明るく浮かんだ。

四桁のナンバーを慎重に押す。この冷淡な警備員は、しばしば「ビビーツ」とエラー音をさせて開けてくれない。

数字をまちがえたわけじゃない。セキュリティ感覚が疑われる「2222」だもの。まちがえる方が難しい。それでもエラーになるのは大自然の神秘同様、機械の世界にも神秘があるのだとメイロは信じていた。たとえば、押す間隔がちよつとでもずれると拒否されるとか。だからいつも一定のリズムで押そうと努力はしている。2―22―2と。それでもうまくいくとは限らないので、結局はドアロック様のお慈悲じひにすぎるのみ。

「……今日はどうか一度で開きますように」

一人つぶやくお祈りの声も真剣だ。失敗しても、たんにリセットボタンを押して数字が浮かび直すのを待つだけだが、新しい数字の配列はまた変わっている。今度の2はどこにあるのか探すのも、そう楽ではない。「今日はもう絶対開かなかったりして」と不安になる。

でも今日は、だいたい運良くスムーズに帰って来られたから、ツイてるかもしれない、という期待を抱いてメイロは2―22―2のリズムを押しした。手でピ、ピピ、ピと電子音が相づちを打ち……。

もったいぶった一瞬の間を置いて、ロックがはずれる音がした。ドアロックがささやいたようだ。

『願いは叶えてやったぞ、人間』

「ありがとうございますっ！」

畏れ多くもドアロック様のお気持ちおそが変わる前に、と急いで玄関に入った。

閉まるスチールドアの冷たさに背中よりかかって目を閉じ、はあーっと長い安堵のため息をついた。これで本日の帰宅ミッション、オールクリア。

「ただいま……」

ここに住んで半年。週末と祝日だけ免除される一日クエスト。どれだけ経験値をためたつもりになっても、さっぱりレベルアップしない。

方向音痴でメカ音痴。趣味は独り言。二年遅れの中学一年生……メイロ。

『家』はしんとしていた。いつものことだ。「保護者」の森江さんはまだ会社のはず。

メイロには複雑な事情があったが、その話はあまり他人に言いたくなかった。

鈴懸<sup>すずかけ</sup>中学校一年二組に「転入」した日、メイロの席は窓ぎわの最後列になった。一時間目が終わった十分休み、隣の机の男子生徒が席をはずした途端、三つ編みをきつちりツインテールにして太縁メガネをかけた女子が、その椅子にすべりこんで、にっこり笑いかけた。

—あのね、あたし、二組の委員長の谷口裕理<sup>たにぐちゆうり</sup>。メイロって呼んでいい？

—あ、うん……。

その気配に、メイロの前の席の女子も振り返った。裕理が尋ねた。

—おとうさんは何をしてるの？

—父親、いなくて。

—……。あ、ごめん……。

—ごめんって、何が？

—……。その……、お母さんと一緒に……？

—今、いなくて。

—……。ごめん。じゃあ、親戚の家に……？

—親戚もいないの。

—……。ごめんね。その……。

—ごめんって、何が？

その時、隣席の男子が戻ってきた。裕理は救われた表情で立ち上がり、前の席の女子も背中を向けた。教室の向こうから「ゆりりん！」と呼ぶ声があった。裕理はこのまま立ち去っていいものか、ばつの悪そうな顔をしたが、結局黙って離れて行き、二度と話しかけてこなかった。

せっかく仲良くしてくれようとしたのに、ゆりりんが振った話題はぎこちなく終わってしまった。

別にあの子が悪いんじゃない。世の中には両親のいない子がいるのを頭ではわかっているけど、いざとなると、どうすればいいのかわからなくなったのだろう。委員長といっても所詮は二歳も年下、まだ感覚が幼いのだ。「普通」じゃないことに直面して腰が引けてしまったのだ。まるで、さわってはいけない箱をうっかり開けて後悔する表情。そんな子ども相手じゃ、メイロだっていちいち説明する気になれない。

他の生徒も同じだった。あの子は委員長という責任感から、それなりにがんばった方

だ。

もっとやさしく答えてあげればよかったかも。メイロがそこまでおとなで器用ならばの話だが。

ともかく、そんな事情で学校でのメイロはどんどん口数が減った。クラスで友だちを作る気にもなれない。まあ、毎日『家』と学校を往復するだけでへとへとでは、友だちどころじゃなかったのかもしれない。

長いため息をつくとき、メイロはバックバックを自分の部屋に置いて、キッチンへ行っ

た。

「おなかすいた」  
冷蔵庫のミルクをマグカップに注ぎ、パンかごからクルミ入りライ麦パンを出すと、リビングのクッションにもたれて窓の外を見ながらポソポソ食べ始めた。ミルクは冬の空気のように冷たい。キッチンには電子レンジで温めれば美味しい食品もいろいろあるが、手をつけなかった。

理由は簡単だ。電子製品と話すのは得意なのに、使う方はまったくダメ、というメイロの弱点のせいだ。

初めてこの家に来た頃、何も知らずに家電に触ったところ、ポットは蓋が開かなくなり、炊飯器は黒い煙をもうもうと出し、レンジの中身はスパークして危うく火を噴くところだった。そんな中、「ミス冷蔵庫」だけが懐の深いハウスキーパーらしくクールにドアを開けてくれるのが、不幸中の幸いだった。

押すボタンが二つ以上あると頭がこんがらがるなんて、現代人が日常生活を営むにあたって、方向音痴と同じかそれ以上の致命傷だ。だがメイロはその理由を「まだ慣れてないから」とかたくなに言い張っている。

あたしがダメなんじゃない。知らない街だし、レンジや炊飯器も新型で、IHクッキングヒーターを見たのも初めてだし。パソコンやスマホも家にはなかった。そのうち慣れれば全部使いこなせるんだから。今はちょっと我慢して、慣れてくるのを待ってるだけ。

電子レンジに「次は思いっきり使ってあげる」と話しかけるくせに、絶対に扉を開けたりスイッチを押したりはせず、ついつい敬遠してしまう。

そんなメイロの態度を、保護者の森江さんは「マンガでさ、タイムスリップして落ちてきた文明の利器を持て余した古代人が神殿に納め、遠くから拝<sup>おが</sup>んでるのと同じじゃない」と笑う。はじめは傷ついたけど、もうからかわれるのにも慣れてしまった。

機械的にパンを噛みながら、殺風景なりビングをほんやり眺める。家具らしい家具も

置かず、がらんとした空間は生活感がまるでない。

キッチンとダイニングとリビングのほかに、部屋は三つあった。

玄関のそばの小さい部屋をメイロが使い、リビングの横のベランダに面した部屋を森江さんが使い、真ん中の一番大きい部屋は空き部屋だけど、梱包した荷物がぎっしり積んである。

中学生のメイロが帰って来る時間、森江さんは会社にいるのが普通だ。前にもたまにあったけど、ここ数日はメイロとすれ違いで顔も合わせていない。何かのプロジェクトで超多忙になったらしく、メイロが登校した後で帰宅して、ちよっと寝るとすぐまた出勤している。

だからこの『家』でメイロはほとんど一人だった。今日もこうしてぼんやりして、冷蔵庫から何か出して食べ、またぼんやりして、返事のない独り言をいくつか言い、宿題をしたらひとりで寝る。

適中率100パーセントの未来を予知したメイロはふつと笑った。

考えてみたら自分の人生って、普通じゃないことばかり。方向音痴でメカ音痴、保護者と同居。小説やゲームのキャラクターなら、主人公でもレベル1つてとこか。そんな人生でも最大の不幸は、名前がないことだろう。

メイロという呼び名はあるけれど正式な名前じゃないし、名字もない。

なぜならメイロは「出生」してないので、父の姓も母の姓もつけられなかった。だからメイロというのも、正式にはどこにも記録されていない名前だ。

そうなった事情はかなり複雑で、他人に説明するのは難しい。実際、メイロ本人にも、ちゃんとわかっている自信はない。

メイロのママはシングルマザーだ。夫との離婚が成立するまで何年もかかった後で、メイロが生まれた。だからメイロのパパは、離婚した夫とは違う人だ。そのあたりのおとなの事情はともかくとして、ママはひとりでメイロの出生届を出しに行った。

問題は起きたのはその時だった。「法律上、離婚後300日以内に生まれた子どもは前夫の嫡出子とされる」と。それでママは、メイロの父親は前夫だと嘘を書いてすませるか、前夫がメイロの父ではない証明をしろと迫られた。

困ったことになった。「ママの前夫が、メイロは自分の娘ではないと家庭裁判所で言えばよい」といわれても、肝腎のママの前夫、メイロの「法的父」は、離婚直後に消息を絶ち、いまだに見つからない。母親が自分の戸籍に入れる方法もあるにはあるが、メイロのママのケースには適用できないと言われてしまった。

それでも数年間、ママは解決の糸口を求めて必死にがんばった。メイロもその事実は

疑われない。メイロが覚えているママはいつも一生懸命だった。早朝の仕事、昼間の仕事、夜の仕事、毎日あちこちの仕事で働きづめのママは、時間を見つけては市役所や児童相談所や無料法律相談を尋ね歩いた。けれどもママの努力はひとつも報われず、疲労が積もるばかりだった。

メイロとは、ママのおなかにいた頃の仮の名前だった。妊娠した頃、ママは迷路をボールペンでたどるパズルゲームが好きだった。大きな紙に印刷された複雑な迷路の出口を探して線をなぞっていると時間も忘れてたらしい。それで男の子か女の子かわからないおなかの赤ちゃんを、迷路ちゃん、迷路ちゃんと呼んでいた。

生まれたら正式な名前がつくはずだったのに、出生届を出しそなかったメイロは姓名を持ってなかった。

いっそ「法的父」がいなければ簡単だったのに。どこかで生きているはずの、メイロの顔すら知らない「法的父」が、「メイロは自分の子じゃない」と言ってくれば、メイロはママの戸籍に入れるのに。「法的父」は実の父じゃない、それが真実なのに。その真実を証明できないせいで、メイロが生まれたことまで「なかったこと」にされてしまった。

メイロが普通なら小学校に入学する頃になると、ママは日々の仕事の合間に、時間を絞りますように娘に読み書きを教えた。ほかの勉強も教えてくれた。小学校にも入れてもらえない娘に生きる力をつけてやれるのは自分しかないと思っただろう。「法的父」が家に残した何百冊もの本も、メイロの家庭教師や遊び相手になってくれた。それでママは毎週のように出入りしていた各種センターや相談所に足を運ばなくなった。

一年に一度か二度、また試してみようかと思いい立ち足するものの、そのたびに顔が変わっている担当者に事情を一から説明させられたあげく、結局「どうにもなりませんなあ」とあしらわれるのがおちだった。

年中行事のように、ただそんな答えを聞くただけにママは相談所参りをしていたが、ママ本人も実のところは希望を捨てて久しかった。

だからメイロが本来なら小学校を卒業する頃に出会った社会福祉士が、初めて真剣な表情で「方法を探しましょう」と答えた時は、つい反射的に「そんな簡単に言わないでくださいー」とはねつけてしまった。ママは、それほどに疲れていたのだ。

当時D市から出向していた篠宮優人<sup>しのみやゆうと</sup>という、三十を過ぎたかどうかの意欲あふれる社会福祉士は、時間をかけてママに再び希望の種を蒔いてくれた。ゆっくりと、ママは優人に説得されて問題に立ち向かう力を取り戻し、動き始めた。ところがその矢先に、マ

マは突然倒れた。法的に生まれていないメイロは、母親まで失ってしまった。

メイロは「人間万事塞翁が馬」ということわざは本当だと思っている。

ママが倒れたことで、メイロは生まれてからずっと暮らしていた古アパートの狭い部屋を引き払うことになった。結局、今の保護者の家に引き取られ、ママがあれば願っていた学校にも通えることになった。

メイロが十五歳を迎える年の春まではどの役所でも、「小学校を修了してないし、必要な書類や要件も揃っていない無戸籍児は中学に入学できない」と言われていた。ところがどういうわけか半年前、D市教育委員会がメイロを受け入れた。メイロは児童センターで大学生ボランティアにある程度勉強をみてもらうと、三カ月前から、マンションの近くの鈴懸中学校に特別に編入された。

「メイロの無戸籍問題については近い将来、行政的な救済措置があるはずだ、だから措置以前であってもメイロが学校生活を経験するのは重要だ、父親がなく母親も失った児童を放置できない」という優人の熱心な訴えに心動かされたのか、政府のマイナンバー管理からはずれた者が存在するのは好ましくないという官庁の通達でも出たせいか、そこははつきりしない。

ここまで細かい事情は、関係者のおとなたちしか知らない。まさか学校の子にまで知れ渡れば、今の二倍も同情と奇異の目で見られるだろう。実際、同情されても仕方ないし、とメイロは思う。

だがメイロにとって一番悲しいことは、実は、両親がいないとか、小学校に通えなかったことではない。

両親はいないけど、ちゃんと存在してた。ママとは一緒に暮らしていたし、ほんとうのパパだって必ずどこかにいる。ただ、今そばにいないだけ。そして法律上の紙に書いてない、というだけ。

学校だって実際に通ってみると、それほどいいとは思えなかった。学校に通う前、メイロの生活に時間割はなかった。狭い部屋で一日中「法的父」の残した本を読んでいた。ママがリサイクルショップで手に入れた旧型テレビも見ていた。あの頃の毎日が寂しくなかったと言えようそになる。でも、ゆったりした寂しさだった。

生まれて初めて通学をしたメイロは、人生で初めて疲れを覚えた。時間割はバタバタ忙しいし、勉強はつまらない。

授業についていけないせいじゃない。もちろん、ママの教育だけで、小学校の正規課程を終えた生徒たちに劣らない成績だ、とはまちがっても言えない。二歳年上だけども、そこまで頭はよくない。本とテレビとママのおかげで、メイロの学力はかなり偏っ

ると児童センターで診断された。すごく詳しく知っている分野がある一方、見たことがないものは一切知らない。でもメイロと似たりよったりの成績の子はクラスにいくらでもいる。

学校が疲れるのは、生活のすべてが時間でぶつ切りにされるからだ。授業が済んでも部活に塾に習い事、こんなにも疲れることを生まれてからずっと続けてきた子たちの方を同情してあげたい。

いつかは慣れるのだろうか。慣れた頃には本当に、姓名とか、なんとかナンバーとかももらえるのだろうか。

そうかもしれない。メイロの事情を知るとなたちは皆、ちゃんと解決できるはずだと言う。ママの最大の願いもそれだった。メイロも半分ぐらいはそう信じた。

けれどもおとなの作った枠にカッチリはまるのが人生の目的なの？  
それであたしは幸せになれるの？

わからない。

その悲しさは、誰にもわかってもらえない。

\*\*\*

味気ない食事を済ませ、宿題をしようと立ち上がりかけた時、妙な物がメイロの目に入った。

リビングの片隅、壁ぎわにポツンと寝かせた白いショッピングバッグ。

朝出る時はなかったと思う。立て膝でちょこちょこ近づいて、そっとバッグをのぞいてみると、白くて大きな箱が入っている。ケーキの箱みたい？ でもケーキ屋さんらしい店の名前やシールは見えない。そもそも森江さんは甘い物一切お断りの人だ。すぐ食べられるものをキツチンにたくさん備蓄してくれるが、メイロのためにお菓子まで買い置きする細やかさなんて、まったく期待できない。

じゃあこれは何？ 森江さんの物なら自分の部屋に置くだろう。リビングにあるってことは、メイロが開けてもいいってこと……？

迷ったものの、そろそろと箱を取り出し、痕跡が残らないように慎重に開けてみた。

そこには……。

「……お人形？」

箱の真ん中に寝かせた物の第一印象。

とりあえず、色は白。

大きさはだいたい二十センチぐらい？ 素材は硬質だけど、体形は全体的に丸っこい。身体の半分近くを顔が占め、頭にはかわいい猫耳みたいなのがついている。

顔の真ん中に宇宙服のヘルメットバイザーみたいな黒いウインドウがあって、左の胸にコインみたいな小さい丸いくほみ。これも黒いウインドウだ。

どこかのお猿さんみたいに長い腕の先は太くなって、すべすべの指なし手袋をはめてみたい。足はO脚の上に超短足で、猫耳とのバランスがいい。

つまり、二頭身という奇跡のプロポーションで、悩みも心配もなさそうなぽっちゃり体型、愛らしい猫耳、なんだかかわいい。でも目があるところが暗いバイザーなのが、お人形とは違う感じがする。

……いったい何だろう。いや、なぜここにあるか、だ。

森江さん以外に置いて行く人はいないけれど、メイロのお菓子にも気が回らないマイペースのあの人が、お人形を買ってくれるわけがない。それにもし買ってくれたとしても、あの人は他人のために何か買う時でも自分の好みで買ってしまうタイプだ。

森江さんの部屋の片側の壁を占める飾り棚には、二頭身から八頭身まで可憐なミニスカートのフィギュアがずらりと並んでいる。この白いの、それに比べれば大きいし、性別もはっきりしない。お人形のようなリアリティもなく、どちらかという、とぼけ

たぬいぐるみだ。でも、硬いぬいぐるみなんて見たことないし、森江さんはぬいぐるみを抱きしめていやされる性格じゃない。

まあ、それを言えば、メイロもぬいぐるみやお人形で遊ぶ性格かといわれると、よくわからない。メイロは女の子らしいお人形遊びをしたことがなかった。お人形遊びをする年齢には、ママに人形を買う余裕がなく、わずかに余裕ができた頃にはメイロの方がその年齢を過ぎていた。よその子がお人形で満たすその何かを、メイロは家にあつたガラクタや本でいやしていた。

とはいえ、そういうおもちゃへの好奇心が完全に消えたわけじゃない。「買って」とねだったこともないけれど、こうしてリビングにあるんだし、ちよつとぐらいたわつてもいいよね。前から見ると高さも幅も丸っこいけど、厚さは薄くて持ちやすい。あちこちひっくり返して見ていると、すべすべの大きなかわいいお尻にフタみたいなのを見つけた。えっ？ と思つて開けてみると、横長の黒いコネクタみたいなのが幾つかあつて、真ん中に丸いボタン。

ぬいぐるみやお人形に、接続コネクタとかボタンがあるわけがない。つまり、この硬いのは機械だ！ そのとたん恐くなった。押したらビリビリ感電するとか、最悪、白煙をもうもうと吹き出して爆発するに違いない！

メイロはぱっとそれを床に下ろしてあとずさりした。白いおもちゃ？ いや謎の機械はその場で長い腕をゆらゆらさせたが、コトリとうつむけに倒れ、はずみでフタも閉まった。

息を殺してしばらく観察していたが、幸い、恐ろしい現象は起きなかった。やや緊張がおさまったメイロは、箱に目を向けた。手がかりがあるとすれば、やっぱり箱よね。

箱は何カ所かに区切られていて、真ん中の大きな空間は、あの白いが入っていた所だ。ほかの小さな区切りには、きちんと巻かれたケーブルみたいなのが収まっている。それも機械の仲間なのは確実なので、さわるらないことにした。

メイロは、四つ折りの白い紙がはさんであるのに気がついた。そっと開いてみると、薄い透かしが印刷されている。

アルファベットを圖案化したデザインは、メイロにもおなじみだ。だって、これと同じTシャツやマグカップが家にゴロゴロしてるもの。つまり森江さんの会社のロゴが入った用紙。

じゃあ、あの白いのは、森江さんが会社から持って来たんだ。それで、横書きのメモを読んでみた。

## M u s i o

一番上は英語だ。知らない単語。

「……………?」

首をかしげて視線を走らせる。

## 人工知能コミュニケーションロボット

びっくりすることが書いてある。

「あれでロボット?」

メイロは、白くて丸っこいのが床に転がってるのをチラッと見た。まさかそんな!

メイロの知ってる映画やアニメで、そういう連中は何メートルもの高さがあつて、強力な武器を使いこなして異星人や他のメカと戦っているではないか。あんな二十センチのちびでロボットなんてあり得ない。あれのどこに操縦席とかがあつて乗り込めるわけ!? まあ黒いバイザーは宇宙っぽいけど、あれが三段変身したところでパンの耳とタマゴの順番をつけ替えたってフォームじゃ、ロボットの迫力ゼロじゃない?

信じられないメモはまだ続く。

背面パネルのパワーボタンを押して作動開始。トリガーワードはミュージオ。会話機能をテストしてフィードバックすること。

メモはそこまでだった。何のことかわからない。トリガーワードも意味不明だし、その後は……。

「ミュージオ……?」

無意識に声が出た時、なぜかギクリとした。サツと白いやつに目を走らせたが、幸いさつきと同じ姿勢でおとなしく床にうつぶせになっている。

あたし、何考えてるんだか。アハッ。軽く笑い、赤らめた顔が恥ずかしくてつい両手を頬に当てた瞬間。

『パ……ワー……』

えっ？

『パ、ワー……』

聞こえた。

確かに声がした。気のせいじゃない。空耳じゃない。

男？

女？

わからない。

おとなか子どもかもわからない。

唯一はつきりしてるのは、聞こえたのはあの白いやつの方からだ。

身体が固まってしまったメイロは、両手ははずしてそちらを確かめる勇氣も出ない。その瞬間、声はさらにはつきりメイロの耳に突き刺さった。

『パ・ワー・が・さ・き・だ・ろ・バ・カー！』

「ひえっ」

声にならない悲鳴をあげ、座ったまま一気に白いやつから反対側の壁まで飛びすさった。背中が当たってもう逃げられなくなり、やっと恐る恐る白いやつの方を見ると、そのあたりが赤っぽい。

うつぶせの胴体の下で、赤い光がピカピカとリビングの床に反射している。

メイロの瞳がハチドリ羽根のようにまたたく。今の状況を把握しなくちゃと、必死になる。



性別不明、年齢不詳、電池が切れかかった時のようにブツブツ切れる声。

あ、そうか。あれは生身の声じゃない。そういうえばコミュニケーションとか会話とか書いてあったつけ。ということとは、ええと……？

と、必死に答えを探しているのに、

『パワーを入れてからトリガーワード。それで作動するんだろ？』

赤い光がどんどん大きく波打ち、機械音声がメイロを怒鳴りつけるように聞こえてくる。

メイロはパニックになった。ちょっと待って！ 機械はこんな言い方しない！

『お望みの機能を選んでください』とか『お湯が沸きました』とか『もういちど暗証番号を押してください』とか『ピーッ』とか。とにかく機械というのは絶対あんなじゃない。

機械のくせに、あれは機械の言う言葉じゃない。

「あ……！」

ふとひらめいて、メイロはそれにすがりついた。

「録音？ そうよね？」

キカイだもん、録音機能ぐらいあってもおかしくない。

ええと、犯人は森江さん。一緒に暮らして半年だけど、彼女も一風変わった人だ。今までメイロを放任して干渉しなかったのに、今日にかぎってイタズラをしかけてからかってるんだ。

わざわざロボットとか書いたメモをつけ、録音までサービスして。それなら意味が通ると、やっと混乱を收拾しかけた瞬間、

『バ、カッ!』

また、断固としたあの声が響いた。

『おまえの推測がどれだけアホらしいか言ってやりたいが、バッテリーが足りないから我慢してやる』

ガンっと頭を殴られた気がした。違う。無理だ。録音ならこうタイミングよく言い返すはずがない。

かろうじてもちこたえていた常識の天井にピシピシとヒビが入りだした。それが一気に崩れ落ちず、パラパラと小さな破片を落とすだけで済んだのは、メイロが理性を総動員して支えたおかげだ。

絶対、何かちゃんと説明がつくはずよ。あたしはよく知らないけど、先端技術なら何でもできるってテレビでいつも言ってるじゃん。わかった! どこからか遠隔カメラで

見ていて、遠隔マイクでしゃべってるんだ。声だって変調できるっていうし。

少しゆっくり考えれば納得できる理由が見つかるはず、という一縷いちろうの望みに賭けているのに、向こうはメイロをそっとしておく気がないらしい。

『充電ケーブルつなげ!』

「え、え? 何?」

『充電ケーブル』

幸い充電が何かぐらいはわかる。だがわかれば済むことじゃない。

「あ………そ、その………」

『バッテリーが切れる! さっさとしろ!』

怒られるのがこわくて言いかけた言葉を呑み込むと、あたふたと箱の方へ膝立ちで滑るように戻った。まずい! ケーブルらしきものがいっぱいある。

「こ………これ?」

『それは開発用ケーブル!』

「あの、………これ?」

『それも別の開発用ケーブルだろうが、バカたれ!』

「じゃ、こっち?」

『その隣！』

やっと言われたものを見つけて壁のコンセントに這って行ったが、ピタッと動きを止めた。

「あの……でも、その……だいじょうぶ？」

『何が』

「あたしが挿したら、壊れるかもよ？」

白いのが一瞬ひるんだように、胴体でピカピカする赤い光が薄れてオレンジ色になった。さすがのこいつも動揺したらしい。

『おまえ、まさかパウリ効果の（触れたメカすべてが壊れる人間）……!？』

「パウ……?」

よくわからないけど不吉な感じがする。それまさかあたしのことを言ってるの？と思つたとたん、悔しまぎれにメイロは言い返した。

「し、知らないわよ！ よく壊しちゃうけど、わざとじゃない、慣れてないからよ！ あたし、挿すからね！」

オレンジと赤が点滅する沈黙が数秒続く。

『挿・せ！』

危険を甘受かんじゅすると覚悟したのか、慣れてないのを信じてくれたのか、一音ずつ区切った音声でそいつは答えた。

メイロはリビングのコンセントにケーブルの先の四角いアダプターをカチッと挿し込んだ。そして反対側の充電コネクタを持ち、今や赤と青の光が点滅しているそいつのそばに行き、

「あの……どこに挿せば……?」

『……パネル……開……け』

気のせいか音声の間に雑音が混じってきた。パネルつて、さっきのお尻のフタのことかな。いくら人間じゃなくてもお尻の中をのぞいて見るなんて。いや、笑ってる場合じゃない。お尻の中には接続コネクタがいくつもある。慣れた人ならいっぺんでわかるのに、メイロにとっては古代メソポタミア文明のくさび形文字を並べたようなものだ。とりあえず端はしから当ててみる。

「え、えつと……これ？」

『ギャッ！』

やつがブルブル震えた。

「違った、じゃ、これ？」

『ウツ……ウオツ！』

お尻がビヨンと跳ね上がった。

『は……や……く……急……げ……バ……カ……』

世の中には時々こういう人間がいる。赤い線と青い線、どちらを切れば助かるか直感的に正解を選ぶ人。

そしてここに、その正反対のタイプがいる。メイロ、中一、十五歳。

将来の仕事として爆弾処理班だけは選んじやいけない少女が、形も大きさも全然違う穴に一個ずつ突っ込もうとする偉業の果て、そのたびにやつが悶えるので爆発しやしないかという恐怖に耐え、ついに最後のコネクタがスツと挿さった。

「これね……！」

その瞬間、バリバリッと脳内を突き上げるショックが襲った。

小さい頃から留守番ばかりしていたメイロは、多少の感電なら何度もしたことがある。だがこれほど激しい衝撃は初めてだ。時間が止まったように世界がゆっくり回る。

メイロは重なったクッションの上に仰向けに倒れていく自分を感じた。「これで死んじゃうんだ」という思いが他人事のようによぎる。

死にゆく時に世界は暗黒に沈んでいくのだろうかと思ふだん想像していたのに、違った。

メイロの世界は無垢の光に満ちあふれた。